
二百文字小説

青匙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二百文字小説

【コード】

N5489N

【作者名】

青匙

【あらすじ】

何の捻りもなく、タイトル通り200文字小説のまとめです。短編として投稿したのも掲載しています。

幼い悪戯

「右と左、どっちの手にアメが入ってるでしょー？」

ある日、妹にグーに握った両手を見せ言った。

右は固い拳。

左は若干膨らんだ拳。

妹は両手を見比べ少し悩み、左手の膨らみに気付きぱっと笑顔になる。

「こっち」

オレ爆笑。

「両方入ってませんでしたー」

「ズルイ！」

「騙される方が悪いんだよバーカ」

数分後。

報復のつもりだろう、妹が同じことをしてきた。

「両方入ってねえんだろ」

「よく見てよ」

顔を近づけたオレは妹に殴られた。

スランプ

言の葉遊びはもう飽きた。

こんこんと溢れていた空想の井戸は涸れ果てて、汲めども汲めども桶には虚空があるばかり。

徐々に慣れ親しんでいった語彙達も、今ではすっかり姿を消した。

脳内で構成された世界は、一分も表現されずに崩れた。

早く、早くしろ！

形のないものなんかすぐになくなっちまうんだぞ！

早く形を残せ！

そう言っただけで急かした得体の知れないものは、ますます声高に糾弾する。

木霊して、渴いた音を纏って軋む。

疲れたよ。

忘れっぽい博士

とても頭の良い博士がいた。

ある日博士は閃いた。

「これで資源不足は解消される！」
鼻をかんだら忘れてしまった。

ある日博士は思い出した。

「なんでこんな重要なことを忘れとるんじゃ！」
来客の呼び鈴に気を取られて忘れてしまった。

ある日博士は何かを忘れていることに気付いた。
「なんじゃったかの？」

ヤカンが鳴り出して忘れていることを忘れた。

ある日博士はメモを見つけた。
忘れ物注意。

丁度良いので鼻をかんでメモを捨てた。

春になったからね

姉の部屋に忍び込む。

無人の箱は僕と同じ間取りなのに女の子チックに飾り付けられていた。鏡台に座って化粧品を手に取る。

肌オツケー。

瞳オツケー。

唇オツケー。

偽装を終えた鏡越しの僕は少し姉に似てた。

服も漁って着てみる。おおう、胸が苦しい。鏡の前でポーズを決めて楽しんでいると突然扉が開いた。

しばらく見つめ合った姉はパタンと倒れる。その間に男に戻り揺り起こす。

姉が眩く。

「今ここに変態が……」

僕は冷静に言った。

紅頂く樹木

「どうしたらあのような見事な桜が育つのでしょうか」

先祖代々継承される庭園。

曾祖父より以前に造られた、自然を模した日本庭園を訪れる者は皆、視界を薄紅色に染める花弁に嘆息し称賛の言葉を述べる。

初見で終わる相手は良い。

齡三百を越える江戸彼岸に圧倒され、何か言葉を話すのは今際の時より他にない。

油断ならない足繁く通う者は、時折秘密を解き明かそうと目論む。

私は答えない。

昔から決まっている事だ。

桜の下には

モラル

こどものどもを漢字で書いた。怒られた。

「子どもを漢字で書くなんて信じられない！」

「はあ」

「貴方、供っていう漢字がどんなに酷い意味か知ってるの？」

「いいえ」

「供の意味はね、従者。つまり奴隷よ奴隷。」

それにお供えなんて縁起の悪い字にも当てるのよ。それを子どもにつけるなんて貴方良心つてもものがないの？」

「そういう意味で書いたんじゃない……」

「以後気をつけて頂戴」

一人になって考える。

子供。

子ども。

何が違うんだか。

とりかえっこ

医者がいる。

台には僕の身体が横になっていた。ずっとベッドに寝てたから手足が細い。

メスを手に医者は僕の身体をパーツに分けた。身体から五臓六腑と両目がなくなった。

空っぽの身体。綿の入っていないぬいぐるみみたいだ。

ばらばらになった僕の中身が違う病室へ届けられる。

医者達はプレゼントを運んできたサンタクロースみたいに歓迎される。

「やっと手術できるわ」

喜ぶ女性。

僕は思う。

僕の脳みその代わりは何時来るんだろう。

これが大人だ

全力で走れなくなった。

好きなことに集中出来なくなった。

細かな文字を追うのが辛くなった。

子供の頃には当たり前だったことは、大人の俺には難しかった。

子供の頃は早く大人になりたかった。

大人になれば何でも出来るって気がしてた。

ルールが決めた子供の制限が鬱陶しかった。

二十歳を過ぎたら自然に大人になれるって思ってた。

言い聞かせるんだ。

これが大人だ。

これが大人だ。

そう繰り返してまたつまらない大人になってくんだ。

赤ずきん？

ある所に女の子が住んでいました。

女の子は赤い頭巾をしていたので赤ずきんと呼ばれていました。

森外れの小さな家では煙突から白い煙が登っていて、赤ずきんのお母さんがパンを焼いたばかりでした。

「おばあちゃんの所へお使いに行つてちょうだい」

お母さんに頼まれ、赤ずきんはおばあちゃんの住む森の中心へ向かいます。

途中狼に出会いました。

「遊びに来たよ」

「赤ずきんかい。……何だか耳が大きくないかい？」

「それはね……」

踏んだり蹴ったり

いじめられてる亀を助けた。

お礼がしたいと言う亀に無理矢理深海に連れてかれそうになった。

深海に着く前に呼吸が出来ず気絶した。

死ぬかと思った。

意識が戻ったのは病院の一室だった。あれから十年も経っている。

もう亀なんか助けない。

退院して十年ぶりに自宅へ帰ると俺宛てに荷物が届いていた。差出人は不明。

豪華な重箱みたいだ。手紙は達筆過ぎて読めない。

中身が気になる。

早速紐を解いて蓋を開けるとたくさんの白い煙が……。

墓標

ある若者が海外へ旅行に出掛けた。

どうせなら観光地より地元民が暮らしている地域に行こうと若者は思っていた。

「あれは何だ？」

小さな村の外れだった。

杉の並んだ先にある墓場。群衆する墓と離れた場所に、腐乱死体が落ちていた。

「これはひどいな」

獣がかじった後のある腐乱死体から逃げるように、若者は村へ引き返した。

「あの死体は一体何なのですか？」

若者が村の一人に尋ねると、その人はこう答えた。

「墓守だけは殺すなよ」

隙間

「隙間って何だか恐くない？」

彼女はアイスコーヒーをかき混ぜながら、唐突な話題を振った。
カランカラン。

スプーンを回す度、涼しげな音。

カーテンの隙間。

襖の隙間。

世の中理由もないのに怖いもので溢れてる。
ベッドの下の暗がりでさえ怖いんだ。

「うん。そつだね」

何かいそつだもん。

「ていうことで、これを何とかしましょうよ」

コーヒーから取り出したスプーンの先で指したのは一枚の紙。
来月のシフト表はほとんど空白だった。

行列

高校の帰り道、とても気になることがある。

ずらりと並んだ人人。人の行列が平日休日祝日、時間も天候も関係なく続いてるんだ。

一体何の行列なんだ？

行列の最後尾から先頭に向かって歩く。並んでいる人は性別年代全てばらばら。

これだけの人はどこから集まって来てるんだろう。

何人かが、僕を列を乱す不届き者と見て睨んでいる。

なかなか先頭に辿り着けない。

「これ、何の行列なんですか？」

「皆それを知るために並んでるんだよ」

ある朝の

犬が吠えた。

猫が唸った。

羊が群れた。

豚が転がり。

山羊が草食み。

馬が嘶く。

鶏に起こされて、男は杖を手に取り家を出た。

小屋から家畜を放牧し、男は家畜のよく見える丘で腰を降ろしパイプを燻らせた。

時折犬に命じて、家畜が逃げないように立ち回らせる。男の元へ一通の手紙が届く。兵士になった息子からだ。

手紙には男の家畜を軍へ納めなければならないこと。軍に土地を譲って欲しいことが綴っていた。

男は黙って手紙を破った。

帰郷

私には幼い頃から夢があった。
夢を追い掛ける決心をした夜、寝ている母に別れを告げた。

「失敗したって私の所に来るんじゃないよ」

ある筈のない返事が背中当たって、私はまとめた荷物を持って家を出た。

私は見事に失敗した。

懐かしい玄関を潜ると父が出迎えた。

「母さんに挨拶しなさい」

父は怒るでも呆れるでもなく私を父の使っている寝室へ通した。
母は笑っていた。

小さな枠の中で優しく笑んでいた。

私は静かに蠟燭へ火を点す。

荒れた世界で

荒廃した街は濃霧に包まれ白く霞んでいた。
たった一メートル先も隠れる霧の中を歩く。何も見えない。誰もいない。

服が水分を含んで不快だった。

乱暴に服を脱ぎ捨てる。

日本列島を襲った異常気象は、弱い人から順に命を刈り取っていた。

老人、赤ちゃん、子供はもう見掛けない。

どこにもいないから。

大人でさえ出会わない。

もしこんな世界になる前の世界に戻れたら

「って、空想してからバイトしてる」

「ちょっとは休んだら？」

優柔不断

その女の昼食はいつも決まっていた。

それもツナ、ハムと胡瓜、卵の三種類のサンドイッチ。

偶に浮気はするけれど、それと天然水が昼食の定番だった。

しかし女は三種類のサンドイッチを前に、一度も手をつけず睨んでいる。

真剣な様子に、同僚は昼食を取りながら何事かと様子を窺っている。

「好きなのはツナだけど食べた後匂いが気になるし、卵が最後だと味気ないし、かといってハムは胡瓜が苦手だから最後に食べるのはちよつと……」

日記帳

×月×日 ×よつび

きょう、お父さんとお母さんと三人でうみに行きました。
うみはきれいだったけど、ぼくはおよげないからうみに入るのは
いやだと思いました。

お父さんはうみでおよぐと気持ちいいぞって言ってぼくをうみに
なげました。

思ったよりながれがはやくてこわかったです。
あつという間にお父さんたちが見えなくなって、もうダメだと思
いました。
しらないお兄さんが助けてくれてよかったです。

もううみには行きたくないです。

日記帳（後書き）

一応ホラーのつもりです。

難しい。

ピエロ

ピエロはピエロを辞めた。
突然だった。

「いきなりどうしたんだ」

メンバーが欠けて、団長は困った様子でぼやいた。

ピエロが泊まっているホテルを訪ねると、陽気な化粧を落とした
ピエロは悲しげに団長と向き合った。

「一体何があつたんだ？」

聞いてもピエロは泣くばかり。
団長は、何かの事件にピエロが巻き込まれたのではと不安になっ
た。

「何があつた」

強い口調で問う。

漸くピエロは理由を言った。

「化粧アレルギーになったんです」

子豚の事情

ある日。

色々複雑な事情があり、三匹の子豚達はお母さん豚の家から出ていくことになった。

三匹の兄弟はそれぞれ家を作ることにした。

一番上の豚は藁の家。

真ん中の豚は木の家。

一番下の豚は煉瓦の家。

家で寛ぐ三匹の子豚の元へ一羽の兎がやってきて尋ねた。

「どうして皆違う家を作ったの？」

一番上が答えた。

「簡単だから」

真ん中が答えた。

「藁だと風で材料が飛ばされちゃうだろ」

一番下が答えた。

「もう木材がなかったんだよ」

子豚の行方

大喰らいの狼がいた。

狼は藁の家を息で吹き飛ばして一番上の子豚を食べた。

子豚を食べた狼は、木の家も吹き飛ばして真ん中の子豚を食べた。

二匹の子豚を食べた狼は煉瓦の家も吹き飛ばそうとして、吹き飛ばせなかった。

狼は煙突から中へ入ろうとして、腹の重さに誤って熱湯が入った鍋に落っこちた。

煮詰められた狼は一番下の子豚に食べられた。

生き残った子豚の胃袋には、狼と狼が食べた一番上の子豚と真ん中の子豚が収まっている。

大根役者

突然で何なんだがね。

この言葉を聞いたとき、僕の背筋はピリツとしたもんだ。

「こんなことは言いたくないんだが、我が社の経営が傾いている」とは君も知っているだろう」

「……はい」

「社員をこのままの人数で雇い続ける事が出来なくなった。君には今月限りで辞めてもらうよ」

「そんな。待ってくださいよ」

「もうこの話は終わりだ」

クビを宣告された同僚がとぼとぼ自分の席へ戻っていく。

仕方ないよな。

働くふりが下手なんだもん。

大富豪 or 大貧民

飲み屋で同僚と、トランプゲームの名前は大富豪か大貧民かで盛り上がった。

俺の帰宅を出迎えたのは、子供達だった。

「パパ。絶対、来週はどっか連れてってよ」

「うあ、酒臭い！」

「遊園地ーっ遊園地いーっ」

否、悪ガキ三人兄弟が足にまとわりついてくる。

妻に援護を求める視線を向ける。

「私も遊園地に行きたいわ」

輝く妻の笑顔。

ぎゃんぎゃん騒ぐ子供達と同じ意見に愕然とする。

四対一。

形成逆転。

俺は財布の中身が心配になった。

私が殺した

妻を殺したくなつた。
唐突だつた。

五十年間連れ添つた妻は、隣に敷いた布団の中で何も知らず眠り続けている。
ゆっくりと上下する胸を見て、急にそれを止めてしまいたくなつた。

薄く開いた唇から長く息を吐き出す。躊躇いがちに伸びた手が妻の首へ届きそうになる。
これまでの妻と、これからの妻。それを思うと不憫でならなかつた。

医者言葉が執拗に過る。

認知症。

男の知る妻は、これから徐々に消えていくのだ。
手が、首に届いた。

サンタとサンタ

「兄さん、あれは何ですか？」

「見ての通りサンタさんじゃないですか」

どこにもありそうなアパートの一室。どこにもいそうな兄弟が、どこにもありそうなコタツに入って窓の外を眺めている。

彼らのアパートの前にはよく似たアパートが並んでいて、向かい側の部屋の様子がよく見えた。

「お向かいのお姉さんはもう大人ですよ？」

「そうですねえ」

「それに二人もいます」

「いますねえ」

そこにはお姉さんを挟んで揉め合うサンタがいた。

がんばれつねき

俺は兎。

白いふわふわ兎。

「可愛い！」

また知らない女が俺に抱きついてくる。鬱陶しい。だけど我慢。

内心とは反対に愛想よく振る舞ってみせる。女がきゃらきゃら笑う。高い声が耳障り。

「もういいだろ、行こうぜ」

「もうちょっと待って」

女の彼氏らしい連れの男は不機嫌そうに腕を組んだ。

十分に兎と触れ合った女は男に振り返り、じゃあ行こうかと言った。

「お前、男だろ？」

すれ違い様睨んできた男に、俺は着ぐるみの中で震えた。

屁理屈病

一体女性と付き合うことのどこに価値があるのかと疑問を投げ掛ければ、肯定派否定派曖昧派と、無数の返答が時代年齢性別問わず転がり出てくるであろうことは、そう想像にかたくないわけで。

つまりは延々と語られ尽くした問題の解答を、今更高々人生二十年の青二才たる僕が語る必要はまるでないのだ。

故に、僕は何も語らない。

「好きなら素直に好きですって言えばいいじゃん」

彼女の声。

僕はそっぽを向く。

語らないっいたら語らない。

クロはどこへ行った？

クロがいない。

どうしよう。クロがいなくなっちゃった。

大変なことだと思ったよ。

ちよつと昼寝をしてたんだ。きっとその隙に、クロはどこかへ行っちゃったんだ。

ねえ。

クロを知らないかい？

いつもボクと一緒にだったんだ。これまで離れたことなんて一度もなかったんだ。

真っ黒いやつだよ。

ボクの足元が好きで、いつもそこにいた。

ボクの真似が好きなんだ。

ねえ、どこかで見かけなかった？

え、なに。

明かりを付けて足元を見るだって？

街灯

男は出ていきました。

取り残された女は声を殺して泣いていました。瞳に溜まった雫が目尻から零れ、静かに頬を伝います。悲しい泣き方をする女でした。私はずっと彼らを見守ってきました。男が女に向けた優しい眼差しを、女が男に見せた期待に満ちた顔を私は知っています。

男は女の元へ帰って来ないでしょう。

女は男を思い涙を溢すでしょう。

そして泣き止んだ女は再び前を向くでしょう。

朝の気配に、私はそっと目を閉じました。

夜更け。沈黙。

「……ねえ」

「ねえったら」

「返事してよ」

……。

「寝てるの？」

「ねえ、起きて」

……起きてるよ。

「急に黙るから怖いじゃない」

少し考え事してて。

「へえ。珍しいわね。何を考えてたの？」

大したことじゃないよ。

「気になるから最後まで言って」

本当に、大したことじゃないよ。

「もう、いいわよ。おやすみ」

「おはよ」

おはよ。

「唐突でなんだけど、お前何か悩んでないか？」

一つだけ、ある。

寝ぼけてオカマになるのを止めてくれ。

夜更け。沈黙。(後書き)

くだらない話を書きたくなっただんです。

物書きと毒舌家

あるところにさえない物書きがいて、物書きは腹の底から声を張り上げた。

「感想をくれ！」

物書きの悲願だった。

せつかく書いた小説に一つも感想がないなんて寂しすぎる！
すると一人の毒舌家が立ち止まり、物書きを鼻で笑った。

「何がおかしい！」

物書きが憤慨すると、その様に毒舌家は呆れて肩をすくめた。

「君、感想を貰えるのがさも当然といった様子だがね。

最後まで読めやしない小説に、一体誰が感想を書けるっていうんだい？」

疑惑

弟が殺されたと連絡が入ったのは、上京して三年目のことだった。葬儀の間、霧と雨の中間のような、傘の下を潜り抜けては身体に纏わりつく嫌な雨が降っていた。

喪服の生地の上に白く浮かんだ水滴が雨の不快感を増長させる。

即死だったんですって。

可哀想に。

潜めた声が弟の最期を語る。棺桶には継ぎ接ぎされた弟が収まっていた。

「轢き逃げだつてな」

連絡をくれた友人が言う。

その時気付いた。

俺は途方もない無気力感に苛まれた。

ハル君の秘密

ハル君には秘密があります。

「何してるの？」

「わっ！ ア、アキちゃん」

けれど幼馴染みのアキちゃんにバレてしまいました。

赤面したハル君の手元には一冊のノートが開いていました。

ハル君が物語を書くノートです。アキちゃんがノートを見ているんです。

「アキちゃん……？」

堪らずハル君が呼ぶとアキちゃんは言いました。

「字が汚くて読めないわ」

こうしてハル君の秘密は無事に守られました。

しかしハル君は物語を書くのを止めました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5489n/>

二百文字小説

2011年10月5日19時46分発行